



アレキサンダー・カルダー 『フラミング』 1974年
日本建築美術工芸協会会員 村井 修 撮影

aaca
25周年

2013年10月 会報66号

社 団 法 人
日本建築美術工芸協会

写真家 村井修『世界の広場と彫刻』作品集

なお表紙の写真は、当協会25周年にさいし村井修先生みずから選ばれた作品を毎号掲載しています。



アレキサンダー・カルダー 『フラミンゴ』

1974年 シカゴ市 フェデラル・センター・プラザ、着色スチール、15.9×18.0×7.2m

■ 村井 修 略 歴

- 1928 愛知県半田市に生まれる。
 - 1953 フリーランスとして建築誌や美術誌などの撮影を始める。
 - 1957 この頃より旧都庁舎を始め、丹下健三氏、白井晟一氏などの建築作品、佐藤忠良氏、流政之氏、澄川喜一氏らの彫刻作品の撮影を始める。
 - 1983 「写真都市」(用美社)、
「世界の広場と彫刻」(現代彫刻懇談会、中央公論社、第37回毎日出版文化賞 特別賞)
 - 1990 第6回東川賞『石の記憶』
 - 1993 「HARMONY/Sculpture & Environment」(米国ハーバード大学で開催後、ローマ、テラモ、日本各地)
 - 1996 「そりのあるかたち・澄川喜一作品集」(平凡社)
 - 2010 「京都迎賓館」(平凡社)
 - 2010 日本建築学会文化賞
 - 2012 2012 年日本写真協会功労賞
- www.o-murai.com/home.html

彫刻に時間を与えるモビールで有名なカルダーの作品では、デンマークのルイジアナの岬に立ち、その碧い海と空を背景にして変化する作品が印象に残る。一方でこの「フラミンゴ」のようなスタビル彫刻も公共空間に数多く制作しており、各所にそうした設置例を訪ねたが、このシカゴの作品が代表作と思われる。

周辺のダークグレーの高層ビルに囲まれたプラザの中心にシャープな造形で都市空間と対峙して光彩を放つ。隣に立つ郵便局のグレーペンのガラスに反映する美しさも計算の内か。鳩に餌を与える老婆がひと時和やかな雰囲気を出す。

後年にパリのデファンスに同種の作品を制作しているが、このシカゴの作品にはとても及ばない。近くにあるピカソの作品とともにパブリックアートの古典としての存在を続けることであろう。これは政府の芸術基金の支援作品でもある。

CONTENTS

『世界の広場と彫刻』	村井 修	2
aaca 25周年記念 景観シンポジウム 「21世紀の歌舞伎座と銀座」		3~5
時代の華一輪 「『ほどける風景シリーズ』と私」	安原竹夫	6
会員活動レポート 「2012年11月11日19時46分の記憶」	大田敏彦	7
寄稿 「北海道美術館研修旅行に参加して」	足立欣也	8
「楽しんで学んで楽しんで・盛りだくさんの北海道美術館ツアー」	勝山里美	9
第181回 aacaフォーラム 「隠れた仏たちを語る」	藤森 武	10
これからの aaca		11
平成25年11月1日 一般社団法人へ移行いたします 平成25年度理事会報告 新入会員・会員の移動 募金のお願い		12



開催日 2013年7月29日(水曜日)
午後6時～8時
会場 丸ビルホール

主催 (社団法人)日本建築美術工芸協会

後援 松竹株式会社
銀座街づくり会議

一般社団法人 日本建築学会
公益社団法人 日本建築家協会
公益社団法人 日本建築士会連合会
一般社団法人 日本建築士事務所協会連合会
公益財団法人 日本美術協会
一般社団法人 日本美術家連盟
公益社団法人 日本都市計画学会
一般社団法人 都市計画コンサルタント協会
特定非営利活動法人 日本都市計画家協会

協賛 清水建設株式会社
株式会社岡村製作所
株式会社西彦
株式会社三菱地所設計

協力 三菱地所株式会社
三菱地所ビルマネジメント株式会社

21世紀の歌舞伎座と銀座

第一部 対談

大谷信義氏
株式会社歌舞伎座 代表取締役社長
松竹株式会社 会長
竹沢えり子氏
銀座まちづくり会議 事務局
馬場瑋造氏
株式会社建築情報システム研究所 代表取締役

第二部 パネルディスカッション

岡本哲志
法政大学デザイン工学部建築学科教授
竹沢えり子氏
銀座まちづくり会議 事務局
大沢輝雄
株式会社三菱地所設計 専務執行役員
野村和宣
株式会社三菱地所設計 建築設計第四部 担当部長

司会 日本建築美術工芸協会 専務理事 岩井光男

主催者挨拶 会長 岡本 賢

皆様今晚は。本日はご多用の中
このように大勢の方々にご参加頂
き、誠に有難うございます。

私共、日本建築美術工芸協会は
創立25周年を迎えました。その
名の通り、建築家・美術家と工芸
家が一体となって空間芸術をめざし、それによって文化的
な景観と環境を創造していく、そのような事を理念にして
会員が集まっております。それらの理念に基づいた様々な
新しい景観をとりあげ、毎年シンポジウムを続けてまいり
ました。この度25周年の記念事業と致しまして、昨今の
話題の中心であります新歌舞伎座をテーマに取り上げて、
銀座というのは常に最先端の情報発信をし、常に変化を
遂げている場所でございますけれども、その銀座周辺の
都市環境、都市景観が今後どのような形になっていく
か、大変皆様方興味がおありになるかと思ひます。

そういった話題を本日、松竹の大谷会長、馬場先生、
竹沢先生によっていろいろお話を頂きたい、後半第2部
では建築家の岡本先生、三菱地所設計の大沢様、野村様に
参画頂きまして、新しい伝統と文化をどう繋いでいくか
等々について、お話を頂きたいと思っております。

有意義な時間をひとときお過ごし頂ければ幸いです。
どうぞ皆様方のこれからこの新しい景観についての認識
を深めていただければと思っております。最後に日本建築
美術工芸協会のいろいろな活動に様々なご意見頂きまして
誠にありがとうございます。今後も、是非よろしく願ひ
いたします。どうもありがとうございました。



第一部 対談

(坂 粋)

馬場 宜しくお願ひ致します。

本日は「21世紀の歌舞伎座と銀座」のテーマで大谷信義さんと竹沢えり子さんからいろいろお話を聞きたいと思ひます。これは対談となっていますので私はあんまりしゃべらないでお二人のお話を主にしたいと思ひますので、宜しくお願ひ致します。

「21世紀の歌舞伎座と銀座」と大変何気なく言っているようですが、これは大変意味が深いと思うんですね。銀座のいわゆる大通りの真ん中ではなくて外れているけれども、歌舞伎座があることで銀座も生きて来ているし、銀座があることで歌舞伎座も生きて来ている。また歌舞伎座っていうのは、これも後であれですけど、少なくともここ110年というのは同じ形での建築が出来てきているので、それを受け継いでいくというのはあまり直すことも、加える事もできない、ただ内部的にはいろいろやれる事はあると思ひますが、そのへんの事をまず大谷さんにちょっとお聞きたいと思ひます。よろしくお願ひします。

大谷 宜しくお願ひ致します。

あの計画の一番最初の頃は、一体この銀座地区にどの位の規模の劇場が作れるかと言う事から始まっていますので、デザインも確定せず考え方も固まらないでスタートしたという風に記憶しているのですが、それが色々な法律ですとか条例、また銀座の方と相談している内に、だんだん様子が判って自分たちでも方向性というのが、初めはつかんでいなかった、ですからああいう昔のようなデザインにするというのは、途中から決まってきた、最初のラフな時にはいわゆる近代的な劇場というか、そういうようなデザインっていうか、デッサンもあったように記憶しています。それが途中からみんなで話しているうちに、やはり元へと言うか戻る、隈さんの言う時間の継承という事に辿りついたという事なんです。

まあその歴史ということをややはり考えたのと、ほかの劇場も同じなんです、劇場という物は比較的同じ場所にずっと続く傾向があるように思うので、ご存じのように歌舞伎座は明治22年に完成、最初にできた時は洋風で。

これはやはり当時のデザインの主流ということもあるでしょうし、もうちょっと政治状況もそういう時代だったのではないかなという気がします。それからさっきお話があったように、途中から日本風に変わりました。

それが大正の10年に火事で焼けてしまって、そのあと新しく作り直そうというときに、さあどうしようか というときに、岡田信一郎先生のデザインになりました。



馬場 竹沢さん、ずっと銀座に居られて、いろいろ銀座のまちとほかと比べながらご覧になっていると思いますが、銀座の中で歌舞伎座というのはどういうふうに位置付けて考えておられますか。

竹沢 私は今日一番最初に、銀座に新しい歌舞伎座ができたということを知り、地域として喜んで、嬉しく思っている、本当に地域をあげて喜んで、ということをお伝えしたいと思います。

歌舞伎座というのはやっぱり銀座にとってのランドマークだと思いますし、私、東京マラソンの第一回のときに歌舞伎座の前で観戦したのですが、市民ランナーの方が、歌舞伎座さんの前で立ち止まって、写真を撮っている、普通に参加していられる方がですね、そこでわざわざ写真を撮るわけですね。その姿を見て、ほんとにこのファサード、建物、劇場というのは親しまれているし、みんなの心に残っているんだということを非常に強く感じました。歌舞伎座さんからは2005年の秋にプレス発表する前に、私たち銀座の地域にわざわざご挨拶来て下さいまして、そのときからお聞きして、ですから8年前ですね。いろんな経緯をずっと協議をさせて頂いていろいろなことがあったと思うのですが、その中で、やはり銀座としては、このランドマークとしての歌舞伎座というものをすごく大事の思ってきましたし、実は、いま銀座の建物建替えるときに私たちのところにいろいろ来んですけど、これはもう全くほかの建物ではありえないんですが、私たちもいろんな方からお電話を戴いたり、文化人の方から何かお手紙戴いたりした建物は全く本当に後にも先にも歌舞伎座さんだけです。私たちとしては、建替えをするということに関してはずっと地区としても応援してきましたし、やはり継承、文化の継承というのは、後でお話に出てくると思うのですが、銀座、芝居町であったということがございますので、そういう文化を継承していくという意味で、非常に大事なことであったな、という風に思っております。

(以下 シンポジウム記録をお読み下さい)



第二部 パネルディスカッション

(抜 粋)

岡 本 それでは 第2部のパネルディスカッションに入らせて頂きます。

はじめに私が歴史的な部分をお話させていただきます。次の地図は1643年ごろの寛永期の状況を示しています。ピンク色が町人の町だったところで、右側の黄緑色が武家地だったところです。今の銀座エリアをだいたいの網羅しているエリアがこのぐらいですから、町人地と武家地が一体化して成立していったのが銀座です。それと、芝居町というのが黒い丸でくくられています。右側は江戸図屏風です。下のほうに芝居でにぎわった様子がにぎやかに描かれていますが、江戸図屏風にもこのように克明に描かれています。それと、銀座というのは職人のでもありまして、いろいろな座がたくさんありました。



明暦の大火で銀座は町の構造が変わります。三十間堀を境にして木挽町側に芝居町がずっと続きます。それと左側の今の銀座地区と言われている所が芝口と呼ばれ、新橋から京橋へ行く銀座通りの方向と同時に、木挽町側から山下御門あるいは数寄屋橋の方向の軸が強くなってきました。これが明暦の大火以降だろうと思います。

江戸から明治に入っていきまして、明治22年に歌舞伎座が置かれますが、そのほかに料亭や一橋大学の前身の商法講習所というのが立地していました。和と洋が混ざる場所が木挽町にも成立していったわけです。

大 澤 建築デザインの話をしします。

歌舞伎座は創建時より5期にわたって変遷しております。本日は4期と今回の5期について説明致します。写真を比べて見ますと、どこが変わったのか良く判らないくらい良く似ていると思いま



しかし、冒頭に申し上げておきますが、今回の5期の歌舞伎座というのは、いわゆる保存でもありませんし、復元でもありません。まったくの新築の建物として設計し、施工されました。そうでありながら、今たくさんの方が歌舞伎を見に来られる方達も、どこが変わったのか良く判らないのではないが、そのぐらい昔と変わらないという印象を持っておられると思いますが、具体的にはほとんど同じ場所がないと言っているぐらい変わっています。(中略)



古い建物を使い続けていくことは言うまでもなくとても大切なことです。その建物にはその時代の文化とか人々の思いなどがぎっしり詰まっているものですから、できれば使い続けていってほしいと思いますが、様々な事情でそう

もいかないというケースが当然あるわけです。その時にどうするか。今回、歌舞伎座は事業上の問題など、理由があって建て替えるを得ない。そこで、新しい歌舞伎座をどうやって造ってゆくかという時に銀座の木挽町という場所に建つ歌舞伎専用劇場としてのありようを考えて、ある意味必然的に、途中経過はものすごくいろいろな案がありましたが、最終的には落ち着くところに落ち着いた。保存でも復元でもないですが、町や人々の記憶を継承しながら記憶や性能を現代にフィットしたものに造り替えていく、それがあがる意味、とてもうまくいった例ではないかと思っています。

野 村 先代から受け継いだ部材ということで説明させていただきます。

我々はプロジェクトにかかわる前に細かく建物調査、資料調査をしました。

第4期を設計した吉田五十八が3期の岡田信一郎の設計した建物をリスパクトして、何を受け継いで何を变えていくかという事を考えたのだらう。5期もやはりそういう形でやりました。

4期歌舞伎座から受け継いだものということで、躯体は劣化していますので、部材を何とか継承していきたいと考えました。古い部材、本物の部材はオーラを發します。そういった物を使っていくことが歴史を継承するうえでその内の大きな一つであると考えています。外装の錆(かざり)金物、劇場の出入り口の欄間、外から直接行ける歌舞伎稲荷、劇場のプロセニウムアーチ、廻り舞台の根太は立派な木材を使っていたので、それを再利用しています。舞台など各所の釘隠し金物。元は銅の板金でした。外観は元の形をなるべく踏襲するという事で、再現と言いますが、そういう形でやっています。

それが元の4期の意識が何となく繋がっててくるというところにスパイスが効いているのではないかと思います。



竹 沢 協議してきた内容ですが

地域貢献のことが主でした。銀座はもちろん、お話があったように建物をそのまま保存しようというご意見も世論的にはあったと思いますが、一貫して建替えには賛成していません。ファサードを近代的なビルのようにするのではなく、以前のような記憶を、歴史を継承する事は賛成で、懸垂幕なども大いにかけて、江戸の芝居町の賑わいを感じさせるものにして欲しいとお願いしてきました。地域として歌舞伎座さんを応援したいと申し上げてきました。

銀座には地区計画という制度があり建物も56メートルが限度という地域です。しかし一部の地域に対して文化等の維持・継承に寄与する開発であれば、高さの例外を認める地区計画に改正しました。結果、歌舞伎座さんの超高層が可能となりました。その文化等の維持・継承に寄与する理由の一番は、世界に類を見ない文化水準を持つ活動である歌舞伎を行う世界唯一の専用劇場である。二番目として、歌舞伎座の文化活動が周辺に影響を及ぼして、銀座という街全体の雰囲気加厚みを与えるための中核となる施設であるということ。三番目として、低層部の伝統的なたたずまいが周辺部の沿道空間に強い影響を与え、沿道空間形成上の重要な要素となることが明らかであること。四番目として、歌舞伎座さんの敷地内に限らず、周辺の文化的な活性化や、文化活動に限らない地域貢献活動を積極的につくり出す事について、歌舞伎座さんのご協力の意思をいただいていること。五番目は、国などの公的補助を受けず自らの経済活動によって歌舞伎という文化の維持継承を支えるために、この建物が必要であることについて地域が非常に理解できた。以上が高さについての例外的な配慮が必要であることが銀座の街として合意したという結果で142mとなりました。

(以下 シンポジウム記録をお読み下さい)



「『ほどける風景シリーズ』と私」



安原竹夫

画家

日本建築美術工芸協会会員

作家が何かを表現しようとしたとき、それを後押ししているものは、その作家の環境であるといわれています。今年に入って某公立美術館のコレクション展に前年度収蔵された私の作品『ほどける風景シリーズ—みんないっしょ・前兆—』が選ばれ展示されました。その作品を美術館の学芸員が解説するというイベントがあり、その打ち合わせの折にいろいろな話題が広範に渡って飛び出し、そこで冒頭に挙げた内容とリンクする感じで、子供の頃から学生時代の懐かしい思い出的な話となって、それは『ほどける風景』の作品群のルーツに触れることにもなりました。今回の原稿依頼は、その時の盛り上がった話から拾い上げることにしました。まず、私のところは両親が教員でしたからそれなりに躰けられ、また、私が感じ易い子供だったようで比較的“自由奔放”にそだてられましたので選択した好きなことは殆ど出来ました。そんな私はかなり小さい頃から空を見ることが大好きで、“天空の現象”には敏感に反応しました。わが家は街中にありましたが、当時は高い建物は少なくまだ青い空はいっぱい広がっていました。(但し、地平線は見る事が出来ませんでした) 小学3年頃から中学3年頃まで晴れた日の夕方太陽が西の空に低くなるころ、家のトイレの前に植えてある無花果の樹から屋根に登り、彩る西の天空の不思議な変容の魔術を眺めるのが重要な日課でした。それは夕焼けた西空がさらに華やかで、雲が金色の羽毛のように輝き出し赤い空に浮かんでゆっくりと形を変えながら消えてゆく、そして背景の空はピンク色に変わり徐々にすみれ色になると一番星が輝き始め、それが合図のようにポツンポツンと小さな星々が白く光り出し夜の帳がおりてきます。晩秋から北風の吹く冬、そして春先までがこのすばらしい“イベント”の時期です。また台風や前線の通過前後には時遇現れる夕空の“天空現象”は、それは美しさを超え今流にいうと“崇高”というのにふさわしい出来事です。何はともあれこの天空の一回きりの現象の神秘さ、不思議さに魅了されて、吾を忘れておりました……。そんな折、池谷・関慧星という太陽のコロナの付近まで接近する軌道周るクロイツ群に属する大ホーキ星が出現したのです！当時の私は天文・天体観測関係に興味をもっていましたから、そのホーキ星の出現によって更に熱が入ってしまい、友達との外遊びがない時は町の図書館に出掛けて(この図書館は樹木に囲まれていたので館内は緑の光がさし込む静かで古い重厚な臭いのする、

子供にとっては何か特別な場所のように感じられ、独り占めの気持ちでした)、天文関係の専門書を見つけてはその本を眺めていました。中身はムズカシイので写真や図版、星図や図表などで夢をふくらませていました。その時のことはよく覚えていて、次のような書物を眺めていました。

一恒星社『天文講座I-V』、『天体観測シリーズ』、野尻抱影『星と伝説』、宮沢賢治童話集『銀河鉄道の夜』他、ガリレオ『星界の報告』、『かたつむりらいんの研究』、『星座とギリシャ神話』、関勉『未知の星を求めて』、ヘベリウス、フラムスチードの星図、“天動説と地動説”ガリレオ、ジョルダーノ・ブルーノ、コペルニクス、ケプラー、占星術ホロスコープ、ヘルメス・トリスメギストスの“錬金術”など(当時は天文関係の専門書は町の本屋さんには置いていなかった)

さて、学年が進み中学・高校時代は、母が洗濯や台所をしながら小さな声で唱歌、子守唄、モーツァルトやシューベルト、フォスターなど歌曲を口ずさんでいたのを何か心打たれる思いで聞いていました。(後日談で、つらかった時の気分転換だったそうです)そんなこともあってか(?)クラシック音楽を好きになり、学校の帰り、レコード店に通いつめました。高校を卒業する頃には、“アルヒーフの会員”になり、16c~17cのバロック音楽に熱中、レコードを集め、ついにBachの作品に辿り着きました。無伴奏チェロ組曲やカンタータの作品群を聴きBWV番号を増やしていきました。(独語やキリスト教史も齧りました!)そうした学生時代を卒業して一年目の通勤帰り、駅の書店で梅原猛の本に出会い、以前から万葉集や歴史が好きでしたので“梅原古代学”にすぐのめりこみました。それまで西洋一辺倒だった私は180°の転回!この国の古きよき“伝統の美の力の凄さ、歴史の重さ”に改めて考えさせられ、自覚させられました。

紙面の都合で後半は端折りましたが、現在は流石に屋根へは登りませんが、“天空の現象”には敏感に反応しています。音楽はピリオド楽器とその演奏を聴き、“透明な音色と豊かな響き”そして“技”に惚れこみ15年にもなります。

私の『ほどける風景シリーズ』は、まだまだ続きます。

パブリックコレクション
国立国際美術館 文化庁 京都国立近代美術館 埼玉県立近代美術館
館 浜松市美術館 パニーコーポレーション 北里研究所メディカルセンター 長流美術館 他



100 cm x 250 cm



100 cm x 230 cm

『ほどける風景シリーズ みんないっしょ—こだま』
金属にカービング、和紙、布に箔、墨、アクリル、顔料、プリンティング 他

会員活動レポート

「 2012 年 11 月 11 日 19 時 46 分の記憶 」



大田敏彦

日本建築美術工芸協会会員

幾度となくこちらを振り向きながら、私を紹介し賛辞をくださる Firenze 市議員の蜜語を聞きながら(最も内容は 2 割と解らないのだが)『どうせ私を知りもしないだろうに…』などと思いつつ、ニヤリとしながら握手を交わし、まるで我が家のように堂々と、而して嫌味のない程度に、時にワインを勧めつつ、時に句(うた)への疑問に答え、手招きされればそちらに行き、声が掛からば笑顔で出向き、ペンを出されたらサインをし、グラスを持たされたら干してやり、握手に答え肩を抱き、レンズの気配に流し目をする…あの時私は、そんな想像を無限にしていたように思います。時は昨年秋、所は firenze ヴェッキオ橋近くのギャラリー、妄想する私は議員の甘言を聞きながらのことでした。生い立ち、学生時代、文学、恋愛、人生など本来書かねばならないことが無蔵にあります紙数の都合で割愛し、本題を続けます。そうです私は、議員の背中を見つめつつ壇上にいました。もう甘言蜜語は聞こえてはいませんでした。想像いや妄想の類も見てはおりませんでした。当然現実には時間は進んでおりまして、知らぬ間に挨拶も別人に代わってありました。人間とは不思議なものです。一定の重圧は、不安や硬直を呼びますが、過度の緊張はそれらを超越するようです。私はもう緊張や不安、硬直の類からは開放されていました。折角頂戴したレポートの場にありますから、なるだけ正確にお伝えしたいとは思いますが、理解不能な文 面になりましたらご勘弁ください。繰り返しますが、緊張や硬直は最早ありませんでした。私はもうその次のステージ、弛緩と脱力、重鈍と泥砂の中におりました。何度も言いますが、人間とは不思議なもの、カチカチで地に足つかぬの後は、ヘロヘロで沈みゆく～になる様です。ヘロヘロで沈みゆく私は、ティアナ(イタリア女性俳人)のスピーチを聞きながら壇上に立ってありました。『出版記念パーティーは二箇所です二日に分けてやりますからね』日本で聞いた連絡事項が頭の中を木霊していました。現地時間 19:24 のことだったと覚えています。始まってまだ 1 時間しか経ってないのか…と思いましたから。ティアナは知的で聡明、美人と言うより可愛い人と呼びたい女性で、長年に渡り俳句を読み布教のもと、彼女についても様々にお話したいことがあるのですが、紙数の都合で割愛し、本題を続けさせていただきます。二回目のパーティーは、Firenze 出身の詩人ダンテ・アリギエーリの生家の前の、中庭のあるバーで行われ、詩集の各

小節の扉絵と巻末の絵を書き下ろして下さったアントニオ・チッコネの偉大さと本来アーティストとはどうあるべきなのかを感じさせて頂けた良い機会だったのですが、始まってまだ 1 時間 20 分しか経っていない一回目のパーティー会場の壇上で、まさに今、挨拶をすると言う私には目下の敵は我にあり、と言った具合で、周りを感じることもすらも難しいことでありました。本当に何度も書いて恐縮ですが、人間とは不思議なもので、沈みゆく私は、第一声を発する瞬間、緊張も弛緩も、妄想も不安も、浮きも沈みもその全てを霧散させ『Toshihiko』と呼ばれる詩人として朗々と挨拶をしていたのです。いや、していたらしいです。らしいと書いたのは、スピーチを終えた時に会場全体から頂戴した拍手と賛辞(勝手に賛辞と思っているだけかもしれませんが)、それは暖かく、幸せであったためです。『どうやら及第点は頂けたようだ』挨拶後、最初に感じたのは、この様な感情だったかと思い出します。最後になりましたが俳句集“Spiga 穂”につきましては Amazon shop の商品説明をそのまま載せさせていただきます。庄五郎が製作プロデュースの 2005 年ジャコモ レオパルディに捧ぐ~聖書シリーズからの第二弾。トシヒコ・ティアナの俳句と イタリアフレスコ画界の巨匠アントニオチッコネの、初書き下ろし 6 展の挿し絵が、みどころ。世界、特に新興国や発展途上国の未来に向けられた、聖書シリーズの二作目。四季や自然、地球や人生を、5.7.5 音で歌いつつ 道徳やモラル、平和や環境維持などの大切さを見事に織り込んでいる挑戦的詩歌集。各章の扉絵とともに、巻末に描かれているアントニオチッコネ作『第六感』~まだ見ぬ世界も、人生に必要な何かを、予感させてくれる名作である。



左上 現地新聞記事(ティアナ、アントニオ)
左下 第二会場でのサイン会
右上 第一会場風景
右下 クリスマス用の包装を終えた詩集たち

「北海道美術館研修旅行に参加して」



足立 欣也

株式会社求龍堂
代表取締役社長

私は現在、絵画の売買および美術書籍の出版を目的に、1923年に祖父が創立した会社の社長を務めております。社名の求龍（きゅうりゅう）は仏語の「CURIEUX」からとったもので、「芸術的あるいは知的好奇心を求める」「常に新しさを求める」ことを意味します。東洋の「龍」に理想を求め、洋の東西を問わず、優れた美術書を出版することを社是としています。今年は創業90周年という節目の年でもあります。この度は、弊社で出版いたしました『美味しい美術館 美術館の雑学ノート』の著者であり当協会会員でもある飯田郷介先生のお誘いにより、この研修旅行に参加させていただきました。

7月1日、早朝7時15分羽田集合ということで、遅刻はできないと、早めに寝床に入ったものの、結局その夜は一睡もできないまま、定刻に集合場所に着きました。その日は、中札内美術村の見学ということで、千歳空港から帯広まではチャーターバスでの移動でしたが、快晴の空の下、広々とした景色を眺めながらの旅はなんとも心が豊かになるものでした。中札内美術村は、広大な原生の柏林の中に「小泉淳作美術館」「相原求一朗美術館」など美術館4館が点在し、美術館と大自然の散策を満喫できる素晴らしい環境のもとにあります。特に「相原求一朗美術館」の建物は、一見瀟洒な美術館に見えますが、実は1927年に建てられた帯広の銭湯を移築したものというのですから驚きです。また同地にあるレストラン「ポロシリ」は中札内村の農産物を素材にした料理メニューがたくさんあり、美味しく堪能させていただきました。中札内美術村より4km離れたところに荒地を開墾、新たな自然を再生した「六花の森」があります。



相原求一朗美術館



六花の森



六花の森工場玄関

そこには、中札内美術村や六花の森を運営する六花亭製菓の包装紙を描いた「坂本直行記念館」などがあり、四季の花と小川に囲まれたとても素敵なおとこでした。翌7月2日は、帯広より富良野の「風のガーデン」、旭川の「旭山動物園」に寄り道し、最後に「国際染織美術館」を見学しました。参加者の一人に、テキスタイル作家の中野恵美子先生がいらしたので、ガイド付き見学です。



アルテピアッツァ美唄



最終日の7月3日は、旭川から、美唄、札幌と回る予定でしたが、生憎天気は雨模様。いつ降りだすか、気がかりでしたが、炭鉱の学校跡地につくられた、美唄市と美唄市出身の世界的な彫刻家・安田侃先生によりつくられた野外彫刻公園「アルテピアッツァ美唄」では雨にあわず、安田侃先生のご子息安田琢さんのご案内でそこかしこに彫刻作品が置かれた園内を散策しました。校舎は修復され、中には作品展示室と幼稚園があり、無造作に、園児の靴脱ぎ場の横に安田侃先生の彫刻作品が置かれています。最後は、モエレ沼公園です。ここは、札幌市がゴミ処理場として利用した後、公園をつくったものです。彫刻家のイサム・ノグチ氏が基本設計をおこない、川村純一先生、斎藤浩二先生が公園を設計しました。当日は、両先生のご案内で、「ガラスのピラミッド」や「海の噴水」「モエレ山」などを見学しました。特に記憶に残っているのは、「海の噴水」です。海をイメージした噴水は、40分ほど続きますが、飽きることないアクロバティックな水の動きに圧倒されました。また、見学前にとった園内のレストラン「ランファン・レ・キープ」の感動的な料理も忘れられませんが、モエレ沼公園では、多少の風雨にあいましたが、あの広々とした公園には、それはそれで、お似合いであったような気がします。

この度の研修旅行は、私が最年少ということもあり、いろいろと皆様にお教えいただくことが多々ありました。有難うございます。また弊社と関係の深い小泉淳作先生、安田侃先生の作品との出会いの旅でもありました。時間が許す限り、またこのような機会がありましたら、参加させていただこうと思っています。



モエレ沼公園「海の噴水」

「楽しんで学んで楽しんで・・盛りだくさんの北海道美術館ツアー」



勝山里美

株式会社大林組
CSR 室 副部長
建築家

5月某日、「北海道内を巡る美術館ツアー」を企画しました。通常の研修旅行ではなく会員交流事業なので協会会員以外の方も参加可能です。行きませんか？」というメールが届いた。

見ると、あの「旭山動物園」に至るまで、私の行きたい施設が網羅され、「モエレ沼公園」はイサム・ノグチと親交の深かった川村純一氏の解説付とある。3日間で約580kmの移動は大型バスだ。

「でっかいどう、北海道」のコピーの通り、北海道は広く、実は私、北海道の美術館をレンタカーで巡る旅を過去に何度も企画をしては、その行程の過酷さに実行に移せないままになっていた。この機会を逃すまいと早速申し込み、会員の皆さまと共に、都度配られるビール片手に、車窓を楽しみながらの大名旅行をさせていただくこととなった。

■なにはともあれ勉強。いつでも解説者がいた

今回のツアーが素晴らしかったことの一つは、どこへ行っても解説者がいたこと。

彫刻家・安田侃の作品を展示した野外彫刻公園「アルテピアッツァ美唄」では、作家のマネシメントをされているご子息・安田琢氏（東京在住）が、北海道滞在中ということで解説に立ち寄ってくださった。

イサム・ノグチが「大地を彫刻する」と語った大規模なランドスケープデザイン構想「モエレ沼公園」の解説は、設計を担当した建築家・川村純一氏とランドスケープアーキテクト・齊藤浩二氏だ。「ぜひ観るべし」という川村氏の助言で実現したのは「海の噴水」の40分のショー。水が噴き上がり、荒波が起り、次第に水が引き静寂に戻るといったダイナミックな水の動勢は、公園全体に生命の息吹を与えていると感じさせるもので、イサム・ノグチの思想を知る貴重な体験となった。

それだけではない。このツアーでは参加者が解説者に早変わりする。世界中の染織品、日本各地の染織工芸品を集めた日本唯一の染織専門美術館「国際染織美術館」では、織造形作家・中野恵美子氏に付いて回っていたら、作品それぞれの織り方や鑑賞のポイントを解説してくれた。AACA賞を受賞した「六花の森」などの六花亭関連施設の解説は、長年にわたり開発を手掛けついに中札内美術村の副館長に就任された飯田郷介氏。「風のガーデン」でガーデニングのツボを解説してくれたのは、ガーデンデザイナー・高柳登美氏だ。

有意義な見学ができたのは、AACAには建築、美術、

工芸など多岐に渡る専門家がいて、どこでも、痒いところに手が届く解説があったからに他ならない。

■忘れてならない、食事の楽しみ

「中札内美術村」では、鬱蒼と茂った柏の木々の間に美術館と共に埋もれるように佇むカフェテリア「ポロシリ」へ。森を散策してたどり着くシチュエーション、そして優しい家庭的な味。北海道訪問は今回155回目という、施設を知り尽くした飯田氏お薦めの料理を取りまくり、心も胃袋も癒やされ放題。柏の原生林の中で都会では決して味わえない自然の恵みを堪能できた。

「モエレ沼公園」でのランチは、ガラスのピラミッド内にある「ランファン・キ・レーヴ」。地元で採れた新鮮な素材を使った本格的なフランス料理で、抜群に美味しい。太田理加による内装は、洗練されたインテリアながらどこかカジュアルな雰囲気でも心地良い。カトラリーがイサム・ノグチから造形学を学んだジェームス川田の代表作「露」シリーズなのも心憎い演出だ。イサム・ノグチの世界を堪能できる公園にふさわしいレストランだ。

■見どころ満載。走り回っても時間が足りない

美術館案内書のお気に入りの一冊『藤森照信の特選美術館三昧』（図書印刷）の中で、「これまで訪れた中で一番遠いけれど、こんなに気持ちのいい美術館はめったにあるもんじゃない」と評された「アルテピアッツァ美唄」は、自然を満喫しながらアートを体感する楽しみがある。建物の中や木々の間に溶け込むように置かれた作品たち、作品を目指して小山を登った先で見つける遠くの街の景色、芝生の広場に設置された真っ白な彫刻作品で水遊びをする子どもたち。どこに居てもどこを見ても、素直な心で楽しみ、自分を見つめることのできる場の連続。何日居ても、さらに素敵な時を味わえそうな芸術広場だ。

タイプの違う「旭山動物園」でも素敵な時間をゲット。目の前をシロクマが泳いで通った！跳び回るテナガザルが頭上にいた！触れそうなところに絶滅危惧種のオオタカがいた！お気に入りのシロフクロウがいた！猛ダッシュながらお目当ての動物たちを観察でき大満足だ。

■そして、楽しみが増えた

今回のツアーで新たに染織の面白さを知り、帰京してすぐに「貴婦人と一角獣展」を訪れ、中世ヨーロッパ美術の最高傑作といわれるタピスリーを鑑賞した。良いものをたくさん観て、自然のパワーを存分に充填し、新たな興味もわいた、明日に繋がる3日間だった。

皆さま、ありがとうございました。再び「…行きませんか？」という案内が届く事を心待ちにしています。

第181回 aaca フォーラム

「隠れた仏たちを語る」



テーマ : 隠れた仏たちを語る

講師 : 藤森 武

日本写真家協会会員

土門拳記念館理事・学芸員

会場 : 京橋創生館 AGC スタジオ

日時 : 2013年7月11日

2013年7月11日 京橋創生館 AGC スタジオにおきまして、第181回 aaca フォーラム「隠れた仏たちを語る」が写真家藤森武氏により行われました。

氏は写真家土門 拳の弟子で13年間晩年の大作の助手を務められました。土門の残した日本文化の伝承、古寺巡礼を引き継ぎ仏の撮影を続けられています。

藤森氏の「隠れた仏たち」5冊の中より「華の仏」「里の仏」「神と仏」「海の仏」「山の仏」からスライド99枚を見ました。素晴らしいものばかりで、胸がときめきました。

日本全国、みちのくから筑紫、四国、京都、広島、大阪、若狭、滋賀、会津と氏が発見した隠れた仏像の圧倒的存在感に驚きを感じました。「私は信仰の対象としではなく立体造形として撮っている。自分の感性で撮影している。」と氏の言葉どおり、仏への視座が特別に研ぎ澄まされておられるのに感動しました。師、土門拳の撮った有名な仏像は撮らない姿勢で隠れ里の隠れた仏たちを探し、発見した時の感動を喜びとしておられます。何百枚の中から99枚セレクトされ、角度を変えて仏の表情の違いを写されていて興味が尽きません。

「華の仏」では陸奥慈恩寺の十二神将、氏いわく神将日本一で干支十二あり十体は写されましたが二体は東京国立博物館にあるそうです。鎌倉前期のもの。他に釈迦如来重文、色っぽいつややかな聖観音立像などすばらしいものです。

「里の仏」では大阪貝塚市孝恩寺の伝弥勒菩薩坐像、帝釈天立像が紹介されシンプルな造形で平安中期のものですがほとんど発表されていません。また、広島県小保利薬師堂の吉祥天立像、薬師如来像などすばらしいものがありました。滋賀県甲賀町の「らく」楽野寺の十一面観音も紹介されました。

「神と仏」では氏は観音様が大好きで二百体撮影されています。観音は慈悲、神は畏敬の存在といわれ、奈良県桜井近く聖林寺観音は有名です。男性的で日本一の像、国宝です。また、岐阜県日吉神社の十一面観音を見ました。ちなみに白洲正子さんが日本一好きな観音らしいです。

「海の仏」は若狭の羽賀寺、古い十一面観音で手が長いのはなぞらしい。平安初期のもの。耳が特徴。また、愛媛松山の部落で見た破損仏をライトアップした時の氏の興奮の感じが感じられました。

「山の仏」では仏像は山から靈感を与えられ古代から敬愛されていた。京都愛宕山の月輪寺千手観音は異国風、九州唐津の浮嶽神社の地藏菩薩、会津勝常寺の増長天、滋賀県湖北鶏足寺の薬師如来は女性的で日本一の像です。同じ湖北木ノ本町にある石道寺でのこと。素朴で親しみのある土地の娘のような十一面観音を真冬に撮影していたところ、おばさまたち八人が毛布をかぶり手を合わせ見守っているさまを見て、村の人に守られ信仰されている仏像をいい加減には撮影できないと実感されたそうです。

藤森武氏の仏像行脚はまだ続きます。隠れた仏を探し世に知らしめる使命感と熱情を感じた熱い一日でした。新たに「湖の仏」「川の仏」を企画中と伺いました。また新たな仏たちとの出会いを楽しみにしております。



撮影 藤森 武

「十二神将巳神像」

山形県寒河江市 慈恩寺 鎌倉時代

文化事業委員会（フォーラム部会） 村松勢津子

自主的活動をさらに後押し ー美術系の人も魅力感じるようー

< 就 任 の 抱 負 を >

aacaには建築に関わる芸術的環境の創造と保全を図り、文化の向上と発展に寄与するという志を持った建築家、工芸家などさまざまな分野の人たちが集まっている。同一の業種や資格などのベースがない珍しい団体で、それが最大の魅力にもなっている。会員は分野を超えて交流しネットワークを広げている。

会員が自主的にイベントを企画し運営しているのも特徴だ。イベントもシンポジウムや講演会、フォーラム、展覧会、見学会などと多彩で、毎月どこかで何かが行われている。こうした自主的で活発な活動をさらに後押しし、aacaの魅力を更に高めたい。

< 協会賞(AACA賞・芦原義信賞)も建築界に浸透している >

本年度でAACA賞は23回・芦原義信賞は12回を数え、応募件数も減ることなく続いている。建築界では重要な賞として浸透、定着してきているが、もう少し美術や工芸のイメージも併せ持った賞にしていきたいと考えている。彫刻作品は入賞しているのもっと彫刻家に参加してもらおうと同時に、工芸や絵画、織物などの作品も幅広く募っていききたい。そのために美術系の人たちに賞の魅力を感じてもらうことが大切だ。

< 当 面 の 課 題 は >

会員の増強だ。組織の持続性の観点からも特に若い会員を増やしていかなければならない。若い人たちにいろいろなイベントに参加してもらい、楽しさや面白さを感じてほしい。未来ある新人のために創設された芦原義信賞の性格を前面に出していく。本年度から新人賞であることをきちんと明記し、若い人たちの応募を促していきたい。

< 文化の育成・向上も重要な使命だ >

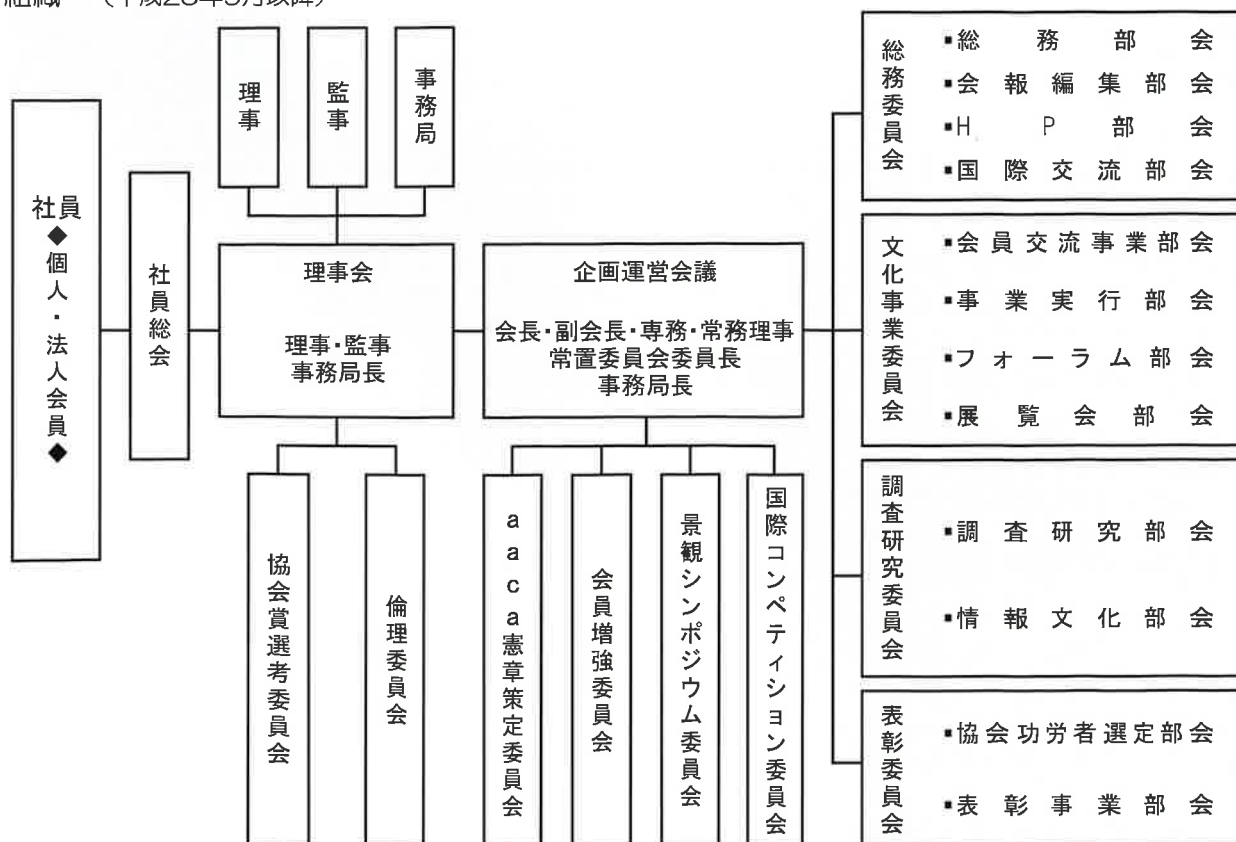
確かにその通りで、aacaでは建築を産業ではなく文化と捉えている。都市景観や街並みの質的向上を図り文化力を高めてゆく活動もしっかりと進めていきたい。総事業費の数%を文化向上のために充ててもらおうと訴えていく。建築は公共の資産であり、官民問わずお願いしていきたい。

< 組 織 面 の 動 き は >

委員会の再編成と運営会議の充実を図る。現在11の委員会があるが、内容を整理し、いくつか統合させる。各委員長が運営会議のメンバーとなり、組織の活動を横断的に審議する会議体にする。活動を制約するのではなく、活動を把握するための組織の見直しだ。会員の自主的で活発な活動をしっかりと支えていきたい。

日刊建設工業新聞 平成25年7月11日(木)

組織 (平成25年9月以降)



平成25年11月1日 一般社団法人へ移行致します。

平成18年に公布された公益法人制度改革法案により、当協会は一般社団法人又は公益社団法人への移行の選択を求められました。その後、理事会にて移行先について検討を重ね、平成22年第二回理事会にて一般社団法人への移行を決議、平成23年度予算総会にて申請手続開始の決議が執られました。後、移行に伴う申請書・定款変更案・公益目的財産額算定等の準備を経て、平成25年2月内閣府大臣官房公益法人行政担当室に申請致し、担当者との協議、書類の修正を重ね、平成25年9月6日公益認定委員会の審査の結果、内閣総理大臣宛に、一般社団法人への移行に適合する旨回答が提出され、内閣総理大臣名の認定書を10月22日受領しました。認定により法務局にて登記を完了いたしました。現社団法人は本年10月末日付にて清算され、協会は現体制のまま一般社団法人として引き続き活動いたします。協会は平成25年11月1日を期して一般社団法人日本建築美術工芸協会となります。

平成25年度理事会報告 (主要案件のみ)

第二回理事会

平成25年7月17日 17時30分～19時

会場 建築会館協会会議室

出席

理事 20名(委任状5名)・監事 1名

欠席

監事 1名

報告：以下の案件について報告され承認された。

- ・文化庁提出事業報告書及び決算報告書について
- ・平成25・26年度理事・監事の登記手続きについて
- ・第1四半期会計報告及び会員動静報告
- ・内閣府法人制度改革に伴う移行手続きについて

議事：以下の案件について審議され決議された。

- ・協会新組織案について審議され本年9月より実施と決定した。
- ・10月開催の企画展覧会について審議され承認された。

新入会員・会員の移動 (2013年7月～2012年10月 敬称略)

新入会員

個人会員

山極裕史 〒105-0005 千代田区丸の内3-2-3 富士ビル

TEL 03-3287-5500 (株)三菱地所設計

徳重千里 〒108-8502

港区港南2-15-2

TEL 03-5769-1325 (株)大林組

会員の移動

長谷川 亨

勤務先住所変更

〒107-0062

港区南青山2-2-15

TEL 03-6447-2722

茶之木 宏次

勤務先住所変更

〒547-0004

大阪市平野区加美鞍作1-11-6-3403

TEL 06-6796-0105

(株)アートフロントギャラリー

法人代表者変更

代表取締役社長 奥野 恵

東日本大震災 「芸術環境復興預金」へ募金のお願い

9月末現在 80,832円

協会では、東日本大震災により逸失した文化財及び地域文化の復興のため、協会指定団体へ平成26年度に寄付を行なう事になり預託先を選定中です。会員の関係先で希望団体が有りましたら事務局迄お知らせください。会員の皆様には活動やチャリティー活動等による売上の一部を募金に協力して戴きますようお願いいたします。

復興預金口座

ゆうちょ銀行

港芝五支店

当座預金

口座名： AACA芸術環境復興預金口座

店番： 019 口座番号： 0338383

会員投稿記事 募集中

会員の皆様の

作品紹介、活動報告、

展覧会、個展等のご案内

企業の広告、出品展等のご案内を

会報に掲載いたします。詳しくは

広報委員会にご相談ください。

会報について

会報へのご意見 ご希望を
お寄せください。(広報委員会)

発行

社団法人

日本建築美術工芸協会

発行人 会長 岡本 賢

〒108-0014

東京都港区芝5-26-20 建築会館6階

Tel 03-3457-7998

Fax 03-3457-1598

Url <http://www.aacajp.com>

E-mail info@aacajp.com

編集

総務委員会 会報編集部会

委員長 岩井 光男 部会長 野口 真理

委員 飯田 郷介 石田 真人 神谷 ふじ子

竹生田 正 徳重 千里 中村 弘子

山崎 輝子



印刷協力

美和野印刷株式会社